

自立に向かう図画工作科の学習

——第6学年「ひらめき名人になろう」～新種、大発見～の実践から——

阿比留 時 彦

1 表現と自立

(1) 想像表現の豊かさ～大人になったからといって～

低学年に見られる見立て遊びやごっこ遊びは、高学年ともなると影を潜めるようになる。そのことは心身の発達と共に、物事を客観的、的確にとらえることに転化される一方、そのまま放置するならば、豊かな想像の世界で遊び、自分を思いのままに表現しようとする活動は滞り、衰退・喪失する結果にもなりかねない。機会をとらえ、恥ずかしがらずに自分を出し切る力⁽¹⁾を育てていくことで、感覚を研ぎ澄まし、想像を広げ、表現の豊かな子どもから大人へと成長していくものと考えられる。大人になったからといって想像の豊かさ、表現の豊かさを望むのは難しいのではないだろうか。

(2) 開かれた新たな出会いと自己決定～新たな見方やとらえ直しを～

例えば、目の前においしそうなりんごがひとつのせられているとする。ふつうに考えると、空腹であれば、食べたいという感情や関心を抱き、満腹なら興味がないとか、置いてあることに気も留めないかもしれない。“りんご”と言えば食との結び付きが強いのだが、りんごそのものの存在を表現ととらえ、多角的な見方をするならば、いろいろなものがそこから見えてくるのである。

りんごの存在や置かれている空間そのものを見つめ、言葉や動作、あるいは音に置き換えてみるのも一方法である。友達と比べ、それぞれの見方・感じ方の似かよいや違いを知れば、よりはっきりと“自分”や“友達”を意識し、自らをふりかえることができる。表現の多様性を示すために、りんごを例にしたが、造形表現は、じっくりとあるものを見つめようとする、このような表現形態の一つであることを言いたかったのである。

描くことを例にしてみよう。一つのりんごを描くといっても、自分の求めに応じていくつもの選択・決定が可能である。どんなものに、何を使って描くのか。丸ごと描くのか、一部分だけを取り出すのか。見る角度を変えてみるとどうか。かじって変形させるとどうなのか。視覚（目）に頼るだけでなく、嗅覚（匂い）や触覚（手触り）などの感覚的な色はどうか。自分が置きたい場所はどこなのかなど、自分らしさの求めに応じて、いくつものイメージを組み合わせることが可能なのである。

普段目にする一つのりんごにも、新たな見方やとらえ直しをすることで、食べることは違う時間的・質的な楽しみ方を広げることが可能になる。面倒臭いと思うことなく自分で考え、決めていくことを楽しむ姿勢はとても大切ではないだろうか。

「できた、できた。先生、次は何をするの。」と問いかけてくる子どもたち。一つのりんごをよく見るとは、そこから豊かで多面的な感情を抱くことだと考えられる。新たな発見や発展へとつながる、新鮮で開かれた出会いの場（＝問い）を共有し、自ら決定していくことが、子どもたちの豊かな思考を巡らすことを保障していくのではないか。そして、この経験の積み重ねで得た充実感が、例え難しいことであっても、興味を自分の方に引き寄せ、楽しさを求め、最後まで持続できるエネルギーを蓄えていくことにつながるのだと考えるのである。

自分で考え、判断し、決定する機会を、それぞれの成長過程や題材に応じて提供しながら、その楽しさや難しさを繰り返し経験することが、自立の一步を助けるものと考えている。

(3) 自立と共生～表現技能はその子の中に～

しかし、例え興味や関心の高まる出会いであり、そこから表現しようとする意欲が引き出せたとしても、なかなか表現へと移行できない場合がある。表現を取り巻く環境には、これまでの経験や、集団としての、またはその場の雰囲気が必要な要因になってくるからである。一人ひとりが自分と向き合うことに真剣に、夢中になれる環境を作り出さなければならない。指導者は、一方的に教え込むことを止め、絶えず、相談相手の大人として交流を保ちながら、子どもの、活動に向かおうとする気持ちの揺れを受け止めたいものである。そのための手段として、友達の活動を観たり、鑑賞に手掛かりを求めたりすることや、一人で考える時間を保障したり、友達や指導者と活動を共にしたりするなど、さまざまな活動の展開を持っておくことが重要になる。

子ども自らが自分を受け止め、受け入れ、表出に向かうような温かな空間づくり。人と人、人との、ものともとの関わりなど、活動を計画的、多面的に絡めながら作り出すことが、指導する側に問われているのではないだろうか。子どもたち一人ひとりが、自分の内面と対話できるほどに造形活動に夢中になり、そして、このような活動を楽しみにしている友達や大人がそこにいれば、その子どもの中にこそ、いろいろな表現力が形となって現れてくるものと考えられる。活動の中に、その子らしい感覚や表現のよさを見だし、指導者や友達、家族などの関心や励ましが基になり、主体的に考え、自らをふりかえろうとするエネルギーが蓄えられていく。このエネルギーが新たな活動を切り拓いていく力となっていくと考えられるのである。

2 実践事例より

(1) 学習活動内容

学 年 第6学年単式学級

題材名 『ひらめき名人になろう』～新種、大発見⁽²⁾より～

題材について

私たちの身のまわりにあふれるたくさんのも。日常的に扱われやすく、手軽に手に入るものほど、その利便性も含め、存在そのものを意識することが少ない。これら、あたりまえのように見たり使ったりしている身近なものを、子どもたちの柔軟な思考力や創造力をもとに、とらえなおす活動を行うことにより、素材としての眼差しを意識させ、新たな可能性への気付きや見方の面白さを豊かに感じ取ってほしいと考えて設定した。

本題材は、6学年となった子どもたちと始めて行う活動である。子どもたちが3学年の時、共に、いろいろな活動を楽しんできた。この子どもたちが、身近な素材を、これまでの経験を活かし、創造主となり、どのような新しい生命を吹き込んでくれるのかを楽しみに期待している。

活動のねらい

ものとの関わりを通して、豊かな見方や感じ方を育む。

身近なものの特徴や面白さに気付き、自分らしい広がりや思いのある表現ができる。

友達の活動のよさに気付くことができる。

活動内容と主な流れ……………10～11時間扱い

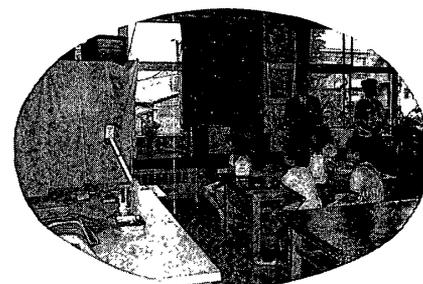
次	時間数	活動内容	教師の指導・支援	子どもの見取り(評価)
第一 次	1	1 題材のオリエンテーション ⁽³⁾ (1) 身近なものの影や実物から、見立て遊びを行う。 (2) ものともとの組み合わせ、新たな生命を吹き込む場を共有する。 (3) 教師の作品を見る。 (4) 学習の見通しを持つ。	学習への見通しとめあてを持つために、身近な素材をクイズ形式で意識する。 ・スクリーンでの投影 ・実物投影機を活用し、素材の組み合わせを行う人と見る人との場の共有を図る。 ・楽しむ雰囲気づくり ・素材収集、学習過程、時間計画などを確認する。	イメージを膨らませながら、学習に入りこもうとしているか。 ・友達の活動に関心を寄せているか。 ・自分なりの見通しをノートに記そうとしているか。
		2 創作活動 (1) 土台づくりをする。 ・ベニヤの切り出し ・タルギの切断 ・クギ留め など	・グループごとに3×6ベニヤを与え、協力して切り出し、思い思いの土台づくりに活かす。 ・土台づくりを基に、自分のイメージを温める。 ・タルギは宿泊を伴う山の学習でのトーチ棒の焼けた部分を切断し、活用する。	・友達と協力して土台づくりを行っているか。 ・自分なりの土台を工夫しようとしているか。
第二 次	4~5	(2) 身近なものを組み合わせ、新たな生命を生み出す。	・子どもたちの活動を進んで楽しみ、称賛・励まし・共感する。 ・個々に応じて、素材提供したり、友達との素材交換など働きかけたりする。 ・友達の工夫のよさを紹介する。	・進んで素材と関わり、素材を活かそうとする工夫やこだわりを持っているか。 ・イメージを膨らませながら、自分の活動に集中したり、友達の活動のよさに関心を持とうとしているか。 ・ノートを活かして、活動を振り返り、次時へのめあてや活動見通しを持とうとしているか。
		3 作品鑑賞と全体のふりかえり (1) クラス作品をゆっくりと一巡する。 (2) 自分の作品へのふりかえりをする。 (3) グループ内での感想交流をする。	・ふりかえりメモを活用し、自他の作品への感想を文章化する。 ・これまでの自分の活動や作品への満足度をメモの色(2種類)により目安とする。 ・学級展示の工夫(課外)	・自他の作品を進んで鑑賞しようとしているか。 ・友達の工夫、がんばり、よさなどを見つけようとしているか。 ・今一度、同題材を行うとしたら、どのようにしたいか考えることができるか。
第三 次	1			

(2) 活動内容からの考察

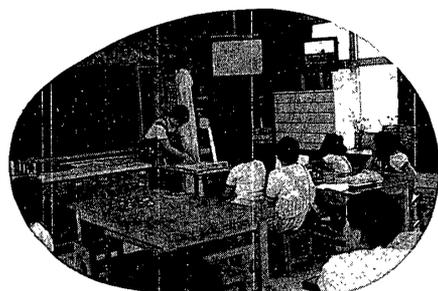
① 第一次から

子どもたちが身近な素材を意識するために、どのようなものをどのように提示すれば、素材への見方・関わり方が変わってくるのだろうか。その素材のよさや可能性の取り上げ方が子どもたちの活動を活性化させ、新たな活動の動議づけにつながるような転移性の高い導入を求めてきた。素材を点・面・立体そしてこれらの複合体として見立て、素材の柔軟な面白さをできるだけ取り上げようと試みた⁽⁴⁾。

次に、指導者の作品(ここでは平面的、半立体的)を見ることだが、これには、賛否両論がある。今回は素材の広がりを見据え、きっかけとして提案してみた。



「この影は何だと思う？」



「何ができるかな。」

否定的な見方をすれば、子どもたちに先入観としての作品づくりへの方向を示唆し、知識・理解・技能などの押し付けにつながりかねない。このことは、子どもたちの試行錯誤から生まれる創造力の育成を阻む結果になりかねない、というものだ。その一方で、題材の面白さを伝え、素材への可能性や特徴を幅広く理解できることや見通しを持って取り組めることが上げられる。ねらいや素材の持つ広がり、あるいは時間計画などを検討して取り上げ方を考える必要があるだろう。

また、取り上げる際には、どのようなものを提示するのも十二分に検討を要する。要素のみ、途中作品、完成品など、さまざまな取り上げ方が考えられる。その際には、子どもたちの実態を的確にとらえ、そこから出発する必要がある。子どもたちの今を知り、守り、さらに育てていくこと。このことは、守・破・離、或いは、耕・求・想・考に向かう⁶⁾道筋を模索することに外ならない。

② 第二次から

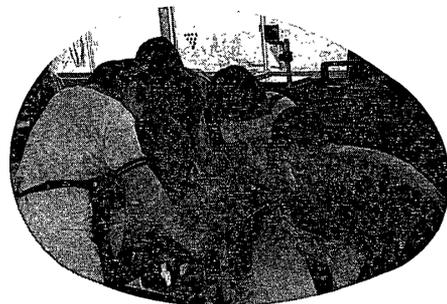
大きな一枚ベニヤから切り出す作業をする。一つの活動から感情が動き、ノートに次のような記述が生じる。〈子どもたちのノートから〉

- 何回やってもうまく動いてくれません。○○君が、「よく見とけよ。」とのこぎりで切ってくれました。とてもうまくてびっくりしました。〈見る、感動する〉
- のこぎりの角度によって切れ方が変わる。平行にすると切れやすくなりました。〈考える、試行錯誤〉
- ベニヤを切るのに時間がとてもかかったけど楽しかったです。〈楽しむ〉
- 初めてベニヤを全部切ってみました。手が痛くてたまらなかったけど、とってもうれしかったです。〈充実感、達成感〉

今の子どもたちに時間をかけ、一つのことを自分で成し遂げる喜びを与えてあげなければならない。友達と分担し協同する、分かち合う喜びを知らせなければならない。たとえ、自分ができなくとも、時間や行為を共有する喜びを経験させなければならない。

土台作りを通じ、できる・できない、うまい・へたなどという競争意識を越えた自己表現が生じているのがうれしい。ノート記述は、自分のその時の心を整理したり、とらえ直したりする学習と共に、子どもたちと私の大切なコミュニケーションの場でもある。

この土台作りの間に、いろいろなものが収集された。そして、温めておいたイメージや偶然の所産からの面白さや難しさを通じ、さまざまな生命が生まれ、さらに空間へと広がっていった。



「うまく切れんよ。」「頑張ってる。」



「ふう、やっとできた…！」

〈子どもたちのノートから〉

- やっているうちに、海を作ってみようかな？とか、まつぼっくりをちぎってみようかな？と、どんどん新しい工夫が出てきて、楽しかったです。
- 始めはダイヤ型（土台）にしようと思ったのだけど、失敗して変な形になってしまいました。でも、それからは、自分の思う通りに～。次回がなんだか楽しみです。
- ～家で考えてきたものをしようとしても色が合わなかったり、変になったりして、難しかった。～簡単だと思ったけど、…難しい。～みんなのを参考にしてみようぞ！
- 友達とガラクタ（我楽多）をかえっこしたりして、自分なりのイメージがうかんだ～。
- 昆虫を立体的に作れた。落ち葉を～ノコギリクワガタのノコギリをうまく作れた。次の時間は、植物を中心に仕上げていきたいです。

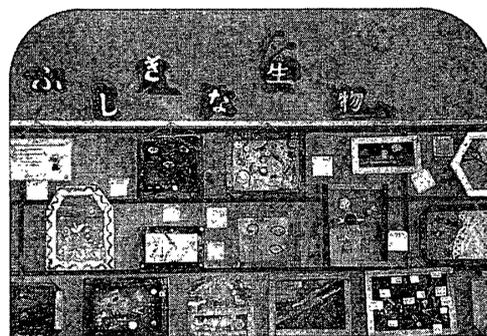
○～スケッチ図～楽しくユニークな作品の完成に近づいたと思います。

め、そのことが自分を探り自分への発見につながるものと考えてきた。そして、このことを新たな活動の引き金としながら、自らの見通しと試行錯誤の場を保障することの大切さを改めて確認した次第である。

これまでもそうであったように、今後とも、価値ある学習とは何かを求め、その中で、子ども自らが考えを引き出し、判断し、よりよいものを求め・決定しようとする機会を与えていかなければならない。その中で楽しさや難しさを繰り返し経験させることが、自立への一步を助け、踏みしめていけるものと考えている。

教育の“教”には求同的，“育”には求異的教育の側面がある⁽⁷⁾と言われる。図工科は、これまでも、また今後も“育”に傾頭し、個々を見据え、個と個のつながりを見据えた教科特性を再度認識しなければならない岐路にさしかかっている。ある一つの素材、空間、環境などに、自ら働きかけることから出発する図工科の筋道は、ものの豊かさや概念的思考の中で子どもたちを他所に、合理的に搦め捕ろうとする社会にあって、その子どもらしい創造性や感受性などの復権を担っている。多くの普遍的知識や情報の中で、腹の底から「なるほど。」「やったあ。」と納得・実感を伴う学習こそが生きてはたらく力に転移していく。直接、対象と関わり、自らの感覚を研ぎ澄まし、普遍的概念を壊しつつもその成り立ちを自分なりにとら直していく視点⁽⁸⁾がますます認識される時だけに、心しなければならない。

私は、子どもたち一人ひとりの興味・関心・意欲を引き出し、いろいろなものの見方、考え方、とらえ方を豊かにするための土台作りを六年間の見通しの中で育てていきたい。表現や鑑賞を通じて対象と向き合う図工科の精神は、今後とも自立に向かう基礎を培う大切な役割を担っていくものと確信している。



〈教室掲示風景〉



《参考文献》

- (1) 北尾倫彦氏講演，本校校内研修より，96. 9. 6.
- (2) 日本造形教育研究会編『第3・4学年造形遊び』より，～へんてこりんな標本～東京学芸大学竹早小学校北澤俊之氏実践，40～43頁，開隆堂.
- (3)(4) 拙稿本校『初等教育68号』35～41頁.
- (5) 梶田叡一氏講演，本校校内研修より，96. 2. 7.
- (6) 日本文教出版，図画工作教師用指導書上，108頁，1996.
- (7) 東京書籍6年，教師用指導書2頁，1996.
- (8) 東京都図画工作研究会編『くるくるアート』より，李禹煥氏，72～75頁，1995.